

歴史的背景

19世紀の後半に、キリスト教誕生以来の西欧文明の思想史においてかつて経験したことのないような世界観の変化をもたらした、科学の発見がなされました。それは、生物進化の発見でした。

当時の多くの人びとの目には、進化の発見によって生まれた新しい生命のヴィジョンは、伝統的なキリスト教の世界観と対立するようにうつりました。これには、二つ大きな理由があります。まず最初に、世界と人間の創造について語っている創世記の最初の三章がどのようなものか、まだふさわしい理解がされていませんでした。もし文字どおりに受け止めるならば、創世記の創造物語は明らかに、科学の発見と調和させることはできません。聖書や神学の中に、この三章を文字どおりに読まねばならないとするものは何もなかったと理解する人は、当時わずかでした。

進化をキリスト教信仰への攻撃と感じたもう一つの理由は、19世紀に、ドイツのヘッケルのような科学者、あるいはイギリスのスペンサーのような哲学者たちが、進化の理論を、彼らの唯物論的・無神論的な世界観・人間観への重要なサポートとして利用したことにあります。

こうして長い間多くの人びとの目に、進化の発見は、人間が神によって創造されたものではなく、霊長類の進化が到達した最後の、最高の産物であるにすぎないことを示しているように思われました。私たちは「神の子」なのか、それとも「サルの子孫」なのか。これら二つの見方のどちらかを選ばなければならないと思われました。

もちろん今日、ほとんどのキリスト者は、よりふさわしい理解に達しています。彼らは、進化のうちに、神が人間を含めてあらゆる生物を創造するために自然の力を用いられた方法を見ることを学んだのです。現在の教皇ヨハネ・パウロ二世は、人間性と創造のよりよい理解のために、神学と進化学とが力を合わせるべきであると、明言されました。

神学と科学の間との和解を可能にした多くのキリスト者の科学者、神学者たちの中で、ピエール・ティヤール・ド・シャルダンには、おそらく最も影響力のあった人物と言えます。彼は、進化の研究が、神がどのように生物界を創造されたのかをよりよく理解する助けとなることを、科学者として身をもって示してくれました。しかしそれだけでなく、さらに大切なことに、イグナチオの霊性に通じているイエズス会士として、彼は、「すべ

てのもの」、特に生命の歴史のうちに現存している神の姿、神の手を見いだすことができたのです。

これらが、私がこの小冊子の中でまず明らかにしようとする二つのポイントです。その上で結びとして、第三千年期の始まりに当たって、教会が、そして全人類が直面しているチャレンジにキリスト者が対応するのを、テイヤールの模範がどのように助けとなるのかを吟味するつもりです。

イエズス会士の科学者の誕生

1881年にピエール・テイヤールが生まれたフランスのオーヴェルニュ地方は、休火山が多く、地質学者にとってのパラダイスでした。ピエールの父は自然を愛する人で、大地と生物の研究への関心を、彼に植えつけました。母の方は、イエズスの聖心に対する深い信心を、彼の心に呼び覚ましました。こうして幼いピエールの心に、科学者としての仕事と、キリストに従う道の両方の種が蒔かれたのです。その後の彼の生涯は、科学の呼びかけとイエズスの呼びかけとが、同じ一つの召命の両面であることを絶えず明らかにしていく冒険であったとすることができます。

その冒険は、1899年、ピエールがイエズス会の修練院に入ったときに始まりました。イエズス会士となった初誓願後間もなくのころ、彼はしばし躊躇を覚えました。地質学への熱烈な関心は、自分のすべてをキリストにささげることの妨げになるのではないだろうか。「岩石の研究」のことは忘れるべきではないだろうか。彼にとって、そして教会にとっても幸いなことに、神の御旨が見守っていました。彼の霊的指導者が、イエズスは彼の心を求めているだけでなく、神が彼に与えられた科学的な関心を発展させることをも望んでおられるのだと、告げたのです。

1902年に修道会がフランスから追放されたとき、テイヤールは共同体と共に、ジャーシー島に避難しなければなりませんでした。そこで哲学の勉強をするかたわら、大好きな地質学のためにも時間を取ることができました。テイヤールが散歩に出るときには必ず、地質学用のハンマーと生物学用の拡大鏡を携えていったことが、友人たちの記憶に残っています。

哲学の勉強を終えた後、ピエールは、カイロにあるイエズス会の高等学校で三年間、物理と化学を教えるために派遣されましたが、このとき、彼の科学への関心は一層強まりました。これは、彼にとって最初の異文化との出会いとなっただけではありませんでした。学

校が休みになると彼はナイル渓谷で魚の骨の化石を収集し、それらをフランスの地質学会に送りました。彼のこの貢献は歓迎され、いくつかの魚の新種には、彼の名にちなんだ名前がつけられました。このことによって、科学が神の望んでいる奉仕の道であるという確信が、彼の心に確かなものとなりました。

彼はエジプトから、神学の勉強のためにイギリスに送られ、そこで 1911 年に司祭に叙階されました。その後長上の勧めで、彼は、パリ自然歴史博物館で、ネアンデルタール人の研究で知られた古生物学者、マルセリン・ブルの弟子となりました。

1914 年にヨーロッパに戦争が勃発したときには、テイヤールは担架兵として志願し、ほとんどすべての主な戦場で奉仕しました。彼は、戦場で負傷した兵士を救出する際の勇気のゆえに、多くの人びとの尊敬と感謝を得ています。二つの勲章が彼に与えられ、そこには、彼の勇気と、どんなに危険が大きくても、彼が戦っている仲間の近くに留まることを望んだことが刻まれています。

戦後、パリ博物館での化石の研究に戻り、そこで 1922 年に博士号を獲得しました。パリのカトリック学院の教授となった彼は、仲間のイエズス会士、リセント神父によって中国に招かれました。リセント神父は、天津に博物館と研究所を開いていたのです。テイヤールはそこで、地質学と考古学の研究を始めました。やがてモンゴル内部やオールドス砂漠への科学的探険旅行を実施し、そこで彼は、それまで知られていなかった、中国に旧石器時代の人間が存在したことを証拠づける石器を発見しました。

1924 年の秋、彼がフランスに戻ったとき、一つの試練がテイヤールを待ち受けていました。宇宙についての彼の新しいヴィジョンを述べた個人的なメモが、神学的に問題となるようなことを含んでいるとみなされたのです。彼の長上はすでに、彼の大胆な哲学的見解に警告を発していました。それらの見解は、特に若者たちの心を引くものでしたが、長上は、テイヤールがこれ以上パリで教えるのを止めさせたほうが賢明と考えました。深く傷つきながらも従順に、彼は中国に戻りました。

中国で、天津から学問の中心である北京に移ると、彼の心は次第にその地になじんでいきました。これが、中国人、アメリカ人、ヨーロッパ人の学者たちとの共同研究を密にした時期の始まりでした。これらの学者たちと、テイヤールは、緊密な交わりをもつようになりました。

1929 年 10 月 28 日、テイヤールとカナダ人のブラック博士は、パリ博物館宛に次のような電報を送っています。「新年のご挨拶を申し上げます。周口店にて、破損されていな

い大人の頭骨を発見。シナントロプスの頭骨は、顔の部分以外は完全なもの。委細は手紙で。」これは、いわゆる北京原人の発見でした。テイヤールは脊椎動物の進化に関する知識を持っていたので、この化石の年代の古さを正確に測定することができました。彼はまた、周口店で見つけられた石器を鑑定し、北京原人がそれらを制作したと考えられると結論づけました。この発見は、人類の起源とその進化の研究への関心を、彼の心に燃え立たせました。

続いてゴビ砂漠、西部中央アジア、インド、ビルマ、ジャワと、次々に探険旅行が実行されました。こうして彼は、アジア先史学、地質学、脊椎古生物学の分野のエキスパートとなりました。テイヤールは、ヨーロッパやアメリカの科学者たちと密に協力して働きましたが、同時に、絶えず若い中国人の研究者を育てることに努めました。そしてこれら中国人の研究者たちは、テイヤールが彼らを深い尊敬を込めて扱うのを感じるのです。

一人の日本人の古生物学者が、みやげ話として、当時のテイヤールの興味深い姿を語ってくれています。彼が北京のホテルにテイヤールを訪ねた時のことでした。それは日中戦争のときで、ホテルの従業員の冷たい態度から、彼が歓迎されていないことが明らかでした。ちょうどその時テイヤールが部屋から下りてきて、この日本人の訪問客を暖かく迎えました。するとその瞬間から、ホテルの従業員の態度がずっと親切になったということです。彼らは言ったそうです。「まあ、私たちは、あなたがテイヤール博士の友達だとは知らなかったのです。」

実際彼は、どこへ行っても、会う人誰とでも友達になってしまうことで有名でした。この彼の性格をいくぶん誇張して、ある仲間のイエズス会士が、彼に冗談で言ったことがあります。「あなたは悪魔に出会ったとしても、『結局のところ、彼はそれほど悪いやつではないよ』、と言うのでしょうか。」

1939年から1946年の間、日本軍は、外国人が北京を離れるのを禁じました。テイヤールはこの軟禁状態の機会を、実験室での研究と、また執筆活動のために用いました。時とともに、過去の生命の研究よりも、人類の未来にとっての進化の意味のほうが、彼の主な関心事となりました。彼の中心的な著作である『現象としての人間』は、この時期に生まれました。その中で彼は、生物進化の研究がいかにして、生命の歴史がたどってきた方向とその歴史の中で人類の位置をよりよく理解する助けになるかを示そうと試みています。

戦後パリに戻ると、中国の科学的研究によって、テイヤールは有名人となっていました。講話を頼まれると、彼はいつも、自分にとって科学の発見が、キリスト教的な世界のヴィ

ジョンの広さ、深さを一層よく理解する助けになったことを、人びとに分ち合おうとしました。

彼はまた、数多くの記事の中で、進化についての科学研究は、キリスト教の教義を現代人に理解しやすい言葉で説明するよう、神学者を招いているのだと説いています。このことは、神によって彼に求められている緊急で、重要な課題のように思われました。中国やアジアで働いていたときに、テイヤールは、いろいろな国の科学者仲間と多くの交流をもちましたが、その体験から彼は、現代の多くの教養人にとって、キリスト教の世界観がふさわしく理解されておらず、科学によって開かれたヴィジョンほど心に響かないことを、鋭く感じ取っていたのです。

第二次世界大戦後数年すると、ヨーロッパの多くの人びとは、テイヤールと同様に、大きなギャップが、教会を社会の大多数の人びとから引き離していることを感じました。喜ばしいことに、ついに、このことを理解する司祭が現れました。科学者としての体験のおかげでテイヤールは、戦後のヨーロッパ人がキリストのうちに真の世の光りを見いだすのを困難にしていた誤解のギャップに、神学者たちが橋を架けるのを助けることができる人物でした。

もちろんテイヤールは、科学者として教育されたのであり、神学者ではありませんでした。彼の書いた多くの記事や講話の中で用いられた言葉は、必ずしも、キリスト教信仰を表明するのに最もふさわしいものとは言えませんでした。復活のキリストへの強い信仰に基づいていたとは言いながら、もって生まれた楽観主義のために、彼はおそらく世の罪を過小評価し、十字架の神秘だけが人類に真の救いをもたらさうることを、それほど明確に受け止めていなかったのです。

彼の著作に見られるこれらの弱点のゆえに、ある人たちは、多くの人びとがテイヤールに対して抱いている熱狂的感激によって真の信仰からそれてしまうことを心配しました。その結果イエズス会の長上たちは、テイヤールに、科学についてのみ書くよう、そして神学のことは神学者に任せるよう告げました。しかしながら長上たちは、パリにいてはそれがどれほど困難かを知っておりました。非常に多くの人びとが、彼の霊的指導を求めていたからです。そこで彼らはテイヤールに、ニューヨークで過ごすよう命じました。

こうして追放の身となり友人たちから離れて、彼は生涯の最後の数年を、ベンナー・グレン人類学財団によってアフリカでなされた科学研究の助言をして過ごしました。アフリカへの二度の旅は、テイヤールが、発見されたばかりのアウストラロピテクス（日本では「猿

人」として知られている) に関する一層の研究計画を支援する機会となりました。

そのニューヨークで、キリストはよき僕であったテイヤールを、1955 年の復活の主日、彼が一週間前に友人に漏らしていた望みどおりの復活祭の日に、ご自分の御許に呼び戻されました。

今日私たちと共にあるテイヤール

復活祭の日の死は、象徴的でもあります。テイヤールの著作の多くは、長上たちの命令に従って、彼の生きている間はほとんど世に出ないままでいましたが、彼が亡くなると間もなく、15 年ほど前に中国で書かれた彼の中心的な著作、『現象としての人間』を初めとして、友人たちによって出版されました。

テイヤールの著作は、出版されるや多くの言語に訳され、何百万というキリスト者や非キリスト者、一般信徒や司祭たちによっても読まれました。

神学者たちも、彼の著作にコメントしたり、必要に応じてそのヴィジョンに修正やバランスを加えたりして、テイヤールが伝えたいと切に望んでいたメッセージを広めることに協力しました。そのメッセージとは、進化は、創造主への信仰の妨げとなるどころか、神の創造を前にしての私たちの畏敬の念を深めるものだという事です。

さらに、しばしば指摘されたように、彼の死の 7 年後に聞かれた第二バチカン公会議の多くのテキスト、特に『現代世界憲章』は、時代の希望に応える教会という、テイヤールが大事にしたヴィジョンの影響を明らかに示しています。

科学者としてのテイヤールの働きは、ニューヨークでの彼の死とともに終わりを遂げましたが、現代世界の使徒としての彼の影響力は、その時始まったばかりでした。それは今もなお、宇宙大の広がりをもつヴィジョンへの彼の呼びかけに応えようとする神学者たちの仕事を通して、あるいは、彼の手紙や本が多くの人びとの霊的生活に与えた影響という形で続いています。

時とともに科学は進歩を続け、当然のことながら、テイヤールが先史学になした貢献はもはやそれほど関心呼びません。それとは逆に、テイヤールが教会に対してなした最も貴重な貢献は、現代における神の子たちの霊的生活への貢献であることが、ますます明らかになっています。

テイヤールの精神

その死後 50 年以上を経た今年もなお続いているテイヤールの影響力は、彼の最もよく知られた著作である、「現象としての人間」と「神のくに」を読むことによって、理解することができるでしょう。前者は、いかにして彼の生物学者、地質学者としての仕事が、生命の歴史についての彼のヴィジョンを豊かに養ったかを明らかにしています。それは、生命の歴史が人間が地上に出現するための準備であったことを示しています。後者は彼の霊的な旅を跡づけるものです。それは私たちに、被造物のあらゆる側面に、また私たち個人の存在のあらゆる相の中に、いかに神の現存と働きを体験するかを教えてください。

この二冊の本はともに、テイヤールの思想をよりよく理解する助けになりますので、ここで、それぞれについて、簡単に説明したいと思います。

現象としての人間

「現象としての人間」の中心になっているのは、進化は一つの方向を持っているという主張です。哺乳動物の進化の研究は、時の経過と共に、神経組織、特に能が次第に複雑に、大きくなってきたことを示していると、テイヤールは見て取りました。同じ傾向を、脊椎動物の歴史にもみることができると、彼は記しています。魚類、爬虫類、哺乳類、そして霊長類と、生命が展開していくにつれて、神経組織がますます重要になっていき、人類においてクライマックスに達します。脳の発達に伴って、動物がますます意識的になり、環境を選んだりチャレンジに対応する自発的な行動の能力が備わってきたことが見られます。人類は、動物の進化との連続性のうちに、その頂点止して出現します。しかしながら、人間だけが自己を意識し、自由意志を与えられており、それによって人間は、自らの行動や未来に対して道徳的な責任をもつ存在となっています。

テイヤールによればこうして、生命の長い歴史にわたって、複雑性、意識、自発性が、生物進化がたどってきた上昇する方向を定めているということが、経験的に証明されています。さらに、この運動の上昇線は、二つの方向に延長することができます。地質上の歴史は、物質の世界、地球の形成が、次第により複雑な化合物を生み出し、それによって生命の誕生の準備となったことを示しています。生命の歴史のもう一方の端では、人間の社会が、狩りをする遊牧民の群れから、定住の村落へ、町へ、都市へ、そして国家へと、次第に大きく複雑になってきたことが見られます。複雑性ととも、意識も増大してきました。技術や、文字その他の情報の伝達の方法の発展は、動物の進化にすでにみられる傾向

の延長とみなすことができます。さらに、この絶えず続く発展の結果として、人類はますます一つに結ばれていき、地球上の活動のグローバリゼーションとして今日知られているものに向かっていきます。

要するにテイヤールの目には、何も拒むことのできない力、私たちを絶えず一前方へ、上方へと促し、究極的な一致、テイヤールがオメガ点と呼んだ点に向けて導いているただ一つの力が存在しているのです。

キリスト教信仰によって彼は、その唯一の力を、被造物のうちに働いている神のエネルギー、私たちを神との一致へと招いている創造的な愛の力と理解しています。

神のくに

すでに述べたように、テイヤールは、イエズス会士になったばかりのころに、神は彼に礼拝と奉仕を求めているだけではなく、大地の研究への科学的な関心を開花させ実りをもたらすことを望んでおられるのだと、告げられていました。それゆえ、ある意味で彼は、二つの力、非人格的で宇宙的な物質の世界とキリストの人格的な愛という、いわば二つの星に惹かれるのを感じていました。けれどもまた、彼は、これらの二つの力のどちらかを選ぶ必要のないことも告げられました。しかし、人生において、どのようにこの二つの星を結び合わせるのかについては教えられませんでした。それは、彼の生涯かけての課題となるのでした。

フランスの戦場ですごした戦争の4年間は、神がすべてのもののうちに、戦争という最も暗く、最も恐ろしい場にさえも現存しておられるのを観想し、それについて書くために、神によって彼に与えられた機会でした。「神のくに」は短い本ですが、その中に、戦争のあいだに始まり中国で最終的な形をとった、テイヤールの霊的な旅の主な歩みを総合しています。

この本によって私たちは、テイヤールがいかにして、自分の周囲のあらゆるもの、あらゆる出来事のうち現存し、働いておられる神を見いだすよう、一步一步導かれたか、キリストがどのようにして、彼の心を絶えずあれ程までに強く引きつけた宇宙の中心として彼に現れたかを、知ることができます。「すべてのもののうちに神を見いだす」ことは、この本に述べられている体験を最もよく要約しており、またイエズス会の創立者であるイグナティオの霊性のまさに真髓を表してもいます。さらに、テイヤールは、できるだけ多くの人々に自分の創造のヴィジョン、そして「すべてのもののうちに神を見いだす」とい

う霊的体験を分かってもらおうとして、この本を書いているのです。

「神のくに」のおもなテーマを要約すると、テイヤールは、それらがいかに、キリスト者の心の生活の大切な原理を理解する助けとなるかを説明してくれます。つまり、私たちの小さな自我からの離脱が、より大いなるものに向けて私たちの心を開放してくれるということであり、創造の最高の頂点に導く道程には、十字架が避けがたく存在しているということです。

第三千年期の霊性

現代人のメンタリティの二つの特徴をあげるなら、おそらくひとつは、世界のヴィジョンが全宇宙にまで広がったことであり、もうひとつは、人類の未来に関する共通の関心と言えるでしょう。ここに簡潔に考察したテイヤールの霊的ヴィジョンは、今日多くの人びとが問い続けている質問に答えるのを助けてくれます。

テイヤールのヴィジョンの宇宙的性格は、よく知られています。彼にとって、人間の本性、生物界にあるそのルーツから切り離されるならば、理解不可能です。同時に、理解し愛そうとする私たちの努力において、私たちを通して、私たちのうちに、温かさと明るさを増しているのは全宇宙なのです。同じ宇宙的な次元が、彼の霊性と信仰をも彩っています。

人類の未来への現代人の関心も、テイヤールの霊性のうちに深い共鳴を見いだすことが出来ます。

キリスト教信仰が二千年前の出来事(イエスの誕生、受難と復活)にもとづいているところから、キリスト者は過去二目を据えて生きるものと考えられたかもしれないが、テイヤールはかつて言ったことがあります。しかし現実とはまったく異なります。「マラナタ」(主よ、来てください)という祈りが示しているように、教会が誕生したばかりのころから、キリスト者は、目を未来に向け、キリストの再臨を、つまり創造が完成に達して新しい天と地が復活したキリストの栄光にあずかる時を待ち望みながら、生きてきました。

実際テイヤールは、真にキリスト者にふさわしい態度とは、キリストを待つ人の態度である、と強調しています。この待つことによって、私たちは、キリストの到来を早めることができます。「私たちがその到来を熱心に待ち望みさえすれば、キリストはすぐに来て下さるであろう」と、テイヤールは書いています。

この待つことはそれゆえ、活動的な意味での待つことでなければなりません。私たちが

待ち望んでいるキリストにおける全被造物の一致は、進化を押し進めている方向を私たちの生活にをいて延長させることによってのみ、達成できるでしょう。なぜなら、より意識的に、より自由に、より愛しうるようになることによって、私たちは、すべての人との、そして神との一致を深めることになるからです。「すべて真に上昇するものは、必ず一致に向かう」と、ティヤールは言っていました。真の進歩は必然的に、私たちを違いに、そして全被造物との一致へと導きます。

その最終的な一致に向けて努力するときに、他者との新深い一致は、私たち個人の特性を失わせるどころか、反対に、個々の特性を一層際立たせるのだということを、心に留めるべきです。「真の一致は、一人ひとりを一層深く自己にする」と、ティヤールは繰り返し述べています。私たちはそれぞれ、神が計画しておられる新しい最終的な創造に、何らかのユニークさをもってあずかるべきなのです。

このような一致のモデルを、キリストの神との愛による一致のうちに見ることができません。愛する心だけが実現可能にするこの一致のヴィジョンがティヤールが私たちに分かち合おうとしているヴィジョンでもあります。

北原 隆 電話 03-3929-0847

FAX 03-5991-6928

e-mail:kitahara@hoffman.cc.sophia.ac.jp